菊池君

石川啄木

一

私(わたし)が釧路の新聞へ行つたのは、恰度一月下旬(すゑ)の事、寒さの一番酷しい時で、華氏寒暖計が毎朝零下二十度から三十度までの間を昇降して居た。停車場(ていしやば)から宿屋まで、僅か一町足らずの間に、夜風の冷(ひえ)に頤(おとがひ)を埋めた首巻が、呼気(いき)の湿気(しめり)で真白に凍つた。翌朝(あくるあさ)目を覚ました時は、雨戸の隙を潜つて空寒(うそさむ)く障子を染めた暁の光の中に、石油だけは流石に凍らぬと見えて、心を細めて置いた吊洋燈(つりランプ)が昨夜(よべ)の儘に薄(うつす)りと点つて居たが、茶を注いで飲まずに置いた茶碗が二つに割れて、

中高に盛り上つた黄色の氷が傍(かたはら)に転げ出して居た。火鉢に火が入つて、少しは室(へや)の暖まるまでと、身体を縮めて床の中で待つて居たが、寒国の人は総じて朝寝をする、漸々(やうやう)女中の入つて来たのは、ものの一時間半も経つてからで、起きて顔を洗ひに行かうと、何気なしに取上げた銀鍍金(めつき)の石鹼函(しやぼんばこ)は指に氷着(くつつ)く、廊下の舗板(しきいた)が足を移す毎にキシ〳〵と鳴く、熱過ぎる程の湯は、顔を洗つて了ふまでに夏の川水位に冷えた。

　雪は五寸許りしか無かつたが、晴天(はれ)続きの、塵一片(ひとひら)浮ばぬ透明の空から、色なき風がヒユウと吹いて、吸ふ息毎に鼻の穴が塞(つま)る。冷たい日光(ひざし)が雪に照返つて、

家々の窓硝子を、寒さに慄(おび)えた様にギラつかせて居た。大地は底深く凍つて了つて、歩くと鋼鉄の板を踏む様な、下駄の音が、頭まで響く。街路(みち)は鏡の如く滑かで、少し油断をすると右に左に辷(すべ)る、大事をとつて、足に力を入れると一層辷る。男も、女も、路行く人は皆、身分不相応に見える程、厚い、立派な防寒外套を着けて、軽々と刻み足に急いで居た。荷馬橇の馬は、狭霧(さぎり)の様な呼気(いき)を被つて氷の玉を聯ねた鬣(たてがみ)を、寒い光に波打たせながら、風に鳴る鞭を喰(くら)つて勢ひよく駈けて居た。

二三日して、私は、洲崎町の或下宿へ移つた。去年

の春までは、土地(ところ)で少しは幅を利かした、さる医師の住つて居た家とかで、室も左程に悪くは無し、年に似合はず血色のよい、布袋(ほてい)の様に肥満(ふと)つた、モウ五十近い気丈の主婦(おかみ)も、外見(みかけ)によらぬ親切者、女中は小さいのを合せて三人居た。私が移つた晩の事、身体の馬鹿に大きい、二十四五の、主婦にも劣らず肥満(ふと)つた、小い眼と小い鼻を掩ひ隠す程頬骨が突出て居て、額の極めて狭い、気の毒を通越して滑稽に見える程不恰好な女中が来て、一時間許りも不問語(とはずがたり)をした。夫に死なれてから、一人世帯を持つて居て、釧路は裁縫料(したてちん)の高い所であれば、毎月若干(いくらか)宛の貯蓄もして居たのを、此家(ここ)

の主婦が人手が足らぬといふので、強て(たつ)の頼みを拒み難く、手伝に来てからモウ彼是半年になると云つた様な話で、「普通(ただ)の女中ぢや無い。」といふ事を、私に呑込ませようとしたらしい。後で解つたが、名はお芳と云つて、稼ぐ時は馬鹿に稼ぐ、怠ける時は幾何(いくら)主婦に怒鳴られても平気で怠ける、といふ、随分な気紛れ者であつた。

　取分けて此下宿の、私に気に入つたのは、社に近い事であつた。相応の賑ひを見せて居る真砂町の大逵(おほどほり)とは、恰度背中合せになつた埋立地の、両側空地の多い街路(みち)を僅か一町半許りで社に行かれる。

社は、支庁坂から真砂町を突切つて、海岸へ出る街路の、トある四角に立つて居て、小いながらも、ツイ此頃落成式を挙げた許りの、新築の煉瓦造、(これが此社に長く居る人達の、北海道に類が無いと云ふ唯一つの誇りであつた。)澄み切つた冬の空に、燃える様な新しい煉瓦の色の、廓然(くつきり)と正しい輪廓を描いてるのは、何様木造の多い此町では、多少の威厳を保つて見えた。主筆から見せられた、落成式の報告みたいなものの中に、「天地一白の間に紅梅一朶(いちだ)の美観を現出したるものは即ち我が新築の社屋なり。」と云ふ句があつて、私が思はず微笑したのを、今でも記憶(おぼ)えて居る。玄関か

ら上ると、右と左が事務室に宿直室、奥が印刷工場で、事務室の中の階段（はしご）を登れば、二階は応接室と編輯局の二室（ふたま）。

　編輯局には、室の広さに釣合のとれぬ程大きい暖炉（ストウブ）があつて、私は毎日此暖炉の勢ひよく燃える音を聞き乍ら、筆を動かしたり、鋏と糊を使ふ。外勤の記者が、唇を紫にして顫へ乍ら帰つて来ると、腰を掛ける前に先づ五本も六本も薪を入れるので、一日に二度か三度は、必ず暖炉が赤くなつて、私共の額には汗が滲み出した。が、夕方になつて宿に帰ると、何一つ室を賑かにして見せる装飾（かざり）が無いので、割合に広く見える。二

階の八畳間に、火鉢が唯一個（たつたひとつ）、幾何（いくら）炭をつぎ加（た）して、青い焔の舌を断間（しきり）なく吐く程火をおこしても、寒さが背（そびら）から覆被（おつかぶ）さる様で、襟元は絶えず氷の様な手で撫でられる様な気持がした。字を五つ六つ書くと、筆の尖（さき）がモウ堅くなる。インキ瓶を火鉢に縁に載せて、瓶の口から水蒸気（ゆげ）が立つ位にして置いても、ペンに含んだインキが半分もなくならぬうちに凍つて了ふ、葉書一枚書くにも、それは〱億劫（おくくふ）なものであつた。初めての土地で、友人と云つては一人も無し、恁（か）う寒くては書（ほん）を読む気も出ぬもので、私は毎晩、唯モウ手の甲をひつくり返しおつくり返し火に焙つて、火鉢に抱付

く様にして過した。一週間許り経つて、私は漸々少し寒さに慣れて来た。

二月の十日頃から、怎やら寒さが少しづつ緩み出した。寒さが緩み出すと共に、何処から来たか知らぬが、港内には流氷が一杯集つて来て、時々雪が降つた。私が来てから初めての記者月例会の開かれたのも、恰度一尺程も雪の積つた、或土曜日の夕であつた。

二

釧路は、人口と云へば僅か一万五千足らずの、漸々

発達しかけた許りの小都会だのに、怎(どう)したものか新聞が二種(ふたつ)出て居た。

私の居たのは、「釧路日報」と云つて、土地(ところ)で人望の高い大川道会議員の機関であつた。最初は紙面が半紙二枚程しかないのを、日曜々々に出して居たのださうだが、町の発達につれて、七年の間に三度(みたび)四度(よたび)拡張した結果、私が行く一週間許り前に、新築社屋の落成式と共に普通の四頁新聞になつた。無論これまでに漕ぎつけたのは、種々(いろいろ)な関係が結びつけた秘密の後援者があるからで、新聞独自(ひとりで)の力では無いが、社の経済も案外巧く整理されて居て、大川社長の人望と共に、「釧路

日報」の信用も亦、町民の間に余程深く植ゑつけられて居た。編輯局には、主筆から校正までで唯（たった）五人。

モ一つは「釧路毎日新聞」と云つて、出来てから漸々半年位にしかならず、社も裏長屋みたいな所で、給料の支払が何日（いつ）でも翌月になるとか云ふ噂、職工共の紛擾（ごたごた）が珍しくなく、普通（あたりまへ）の四頁の新聞だけれど、広告が少くて第四面に空所（あき）が多く、活字が足らなくて仮名許り沢山使ふから、見るから醜（きたな）い新聞であつた。それでも記者は矢張（やはり）五人居た。

月例会と云ふのは、此両新聞の記者に、札幌、小樽、旭川などの新聞の支社に来て居る人達を合せて、都合

十三四人の人が、毎月一度宛集るといふので、此月のは、私が来てから初めての会ではあり、入社の挨拶を新聞に載せただけで、何処へも改めては顔を出さずに居たから、知らぬ顔の中へ行くんだと云つた様な気が、私の頭脳（あたま）を多少他所行（よそゆき）の心持にした。午後四時からと云ふ月番幹事の通知だつたので、三時半には私が最後の原稿を下した。

『今日は鹿島屋だから、市子のお酌で飲める訳だね。』

と云つて、主筆は椅子を暖炉（ストウブ）に向ける。

『然し芸妓も月例会に出た時は、大変大人しくして居ますね。』

と八戸君が応じた。

『その筈さ、人の悪い奴許り集るんだもの。』

と笑つて、主筆は立上つた。『芸者に記者だから、親類同志なんだがね。』

『成程、何方（どちら）も洒々（しやあしやあ）としてますな。』

と、私も笑ひながら立つた。皆が硯箱に蓋をしたり、袴の紐を締直したり、莨（タバコ）を啣（くは）へて外套を着たりしたが、三面の外交をして居る小松君が、突然、

『今度また「毎日」に一人入つたさうですね。』と言つた。

『然うかね、何といふ男だらう？』

『菊池ツて云ふさうです。何でも、釧路に居る記者の中では一番年長者（としより）だらうツて話でしたよ。』

『菊池兼治（かねはる）と謂ふ奴ぢやないか？』と主筆が喙（くち）を容れた。

『兼治？　然うです〳〵、何だか武士（さむらひ）の様な名だと思ひました。』

『ぢや何だ、真黒な腮鬚（あごひげ）を生やした男で、放浪者（ごろつき）みたいな？』

『然うですか、私は未（ま）だ逢はないんですが。』

『那麼（あんな）男なら、何人先方（むかう）で入れても安心だよ。何日（いつ）だツたか、其菊池が、記者なり小使なりに使つて呉れツ

て、俺の所へ来た事があるんだ。可哀相だから入れようと思つたがね、』と、入口の方へ歩き出した。『前に来た時と後に来た時と、辻褄が合はん事を云つたから、之は怪しいと思つて断つたさ。』

私は、然し、主筆が常に自己（おのれ）と利害の反する側の人を、好く云はぬ事を知つて居た。「先方（むかう）が六人で、此方（こつち）よりは一人増えたな。」と云つた風な事を考へて玄関を出たが、

『君。二面だらうか、三面だらうか？』

と、歩きながら小松君に問ひかけた時は、小松君は既に別の事を考へて居た。

『何がです？』

『菊池がさ。』

『さあ何方（どちら）ですか。桜井の話だと、今日から出社する様に云つてましたがね。』

私共が、ドヤ〲と鹿島屋の奥座敷に繰込んだ時は、既（もう）七人許り集つて居た。一人二人を除いては、初対面の人許りなので、私は暫時（ざんじ）の間名刺の交換に急がしかつたが、それも一しきり済んで、莨に火をつけると、直ぐ、真黒な腮鬚の男は未だ来て居ないと気がついた。人々はよく私にも話しかけて呉れた。一座の中でも、背の低い、色の黒い、有るか無きかの髯を生やした、

洋服扮装（でたち）の醜男（ぶをとこ）が、四方八方に愛嬌を振舞いては、軽い駄洒落を云つて、顔に似合はぬ優しい声でキヤツ〳〵と笑ふ。

十分許り経つて、「毎日」の西山社長と、私より一月程前に東京から来たといふ日下部編輯長とが入つて来た。日下部君は、五尺八寸もあらうかといふ、ガツシリした大男で、非常な大酒家だと聞いて居たが、如何様（いかさま）眼は少しドンヨリと曇つて、服装（みなり）は飾気なしの、新らしくも無い木綿の紋付を着て居た。

西山社長は、主筆を兼ねて居るといふ事であつた。七子（ななこ）の羽織に仙台平のリウとした袴、太い丸打の真白（ましろ）

な紐を胸高に結んだ態（さま）は、何処かの壮士芝居で見た悪党弁護士を思出させた。三十五六の、面皰（にきび）だらけな細顔で、髯が無く、銀縁の近眼鏡をかけて居たが、眼鏡越に時々狐疑（うたがひ）深い様な目付をする。

『徐々（そろそろ）始めようぢやありませんか、大抵揃ひましたから。』

と、月番幹事の志田君（先程から愛嬌を振舞つてゐた、色の黒い男）が云ひ出した。

軈（やが）て膳部が運ばれた。「入交（いりまぜ）になつた方が可からう。」と云ふ、私の方の主筆の発議（はつぎ）で、人々は一時ドヤドヤと立つたが、

『男振の好い人の中に入ると、私の顔が一層悪く見えて不可（いかん）けれども。』

と、笑ひながら、志田君は私と西山社長との間に座つた。

酒となると談話が急に燥（はしや）ぐ、其処にも此処にも笑声が起つた、五人の芸妓の十の袂が、銚子と共に急がしく動いて、艶（なまめ）いた白粉の香が、四角に立てた膝をくづさせる。点けた許りの明るい吊洋燈（つりランプ）の周匝（あたり）には、莨の煙が薄く渦を巻いて居た。

親善を厚うするとか、相互の利害を議するとか、連絡を図るとか、趣意は頗（すこぶ）る立派であつたけれど、月例

会は要するに、飲んで、食つて、騒ぐ会なので、主筆の所謂人の悪い奴許りだから、随分と方々に円滑な皮肉が交換されて、其度にさも面白相な笑声が起る。意外事（とんだこと）を素破抜かれた芸妓が、対手が新聞記者だけに、弱つて了つて、援助（すくひ）を朋輩に求めてるのもあれば、反対（あべこべ）に芸妓から素破抜かれて頭を掻く人もある。五人の芸者の中、其処からも此処からも名を呼び立てられるのは、時々編輯局でも噂を聞く市子と謂ふので、先刻（さつき）膳を運ぶ時、目八分に捧げて、真先（まつさき）に入つて来て、座敷の中央へ突立つた儘、「マア怎うしよう、私は。」と、仰山に驚いた姿態（しな）を作つた妓（こ）であつた。それは、

私共が皆一団(ひとかたまり)になつて、障子際に火鉢を囲んで居たから、御膳の据場所が無かつたからで。十六といふ齢には少し老せて居るが、限りなき愛嬌を顔一杯に漲らして、態(わざ)とらしからぬ身振が人の気を引いた。

志田君は、盃を下にも置かず、相不変(あひかはらず)愛嬌を振舞いて居たが、お酌に廻つて来た市子を捉へて私の前に座らせ、両手の盃を一つ私に献(さ)して、

『市ちやん、此方(このかた)は今度「日報」へお出になつた橘さんといふ方だ、お年は若し、情(なさけ)は深し、トまでは知らないが、豪い方だからお近付になつて置け。他日(あと)になつて悪い事は無いぞ。』

『アラ然うですか。お名前は新聞で承はつてましたけれど、何誰（どなた）かと思つて、遂……』と優容（しとやか）に頭を下げた。

下げた頭の挙らぬうちに、

『これはおかめ屋の市ちやん。唯（たつた）三度しか男と寝た事が無いさうです。然うだつたね、市ちやん？』

と云つて、志田君はキヤツ〳〵と笑ふ。

『おかめ屋なんて、人を。酷い事旦那は。』

と市子は怖い目をして見せたが、それでも志田君の貸した盃を受取つて、盃洗に浄めて私に献（さ）した。

『印度の炭山（たんざん）の旦那のお媒介（とりもち）ですから、何卒（どうぞ）末長く白ツぱくれない様に……。』

『印度の炭山の旦那は酷い。』と志田君の声が高かつたので、皆此方を見た。『いくら私が色が黒いたつて、随分念を入れた形容をしたもんだ。』

一座の人は声を合せて笑つた。

私は初めての事でもあり、且つは、話題を絶やさぬ志田君と隣つて居る故か、自と人の目について、返せども、〳〵、盃が集つて来る。生来余り飲ぬ口なので、顔は既ポツポと上気して、心臓の鼓動が足の裏までも響く。二つや三つなら未だしもの事、私の様な弱い者には、四つ、五つと盃の列んだのを見ると、醒め果てた恋に向ふ様で、モウ手も触けたくない。芸妓には珍

しく一滴も飲まぬ市子は、それと覚(さと)つてか、密(そつ)と盃洗を持つて来て、志田君に見られぬ様に、一つ宛空けて呉れて居たが、いつしか発覚して、例の円転自在の舌から吹聴に及ぶ。「市ちやんも仲々腕が上つた」とか、「今の若い者は、春秋に富んで居る癖に惚れ方が性急(せつかち)だ」とか、「橘さんも隅には置けぬ」とか、一座は色めき立つて囂々(わやわや)と騒ぐので、市子は、

『私此方(このかた)の為にしたんぢやなくて、皆さんが盃を欲しさうにして被居(いらつしや)るから、空けて上げたのですわ。』

と防いでも見たが、遂々顔を真赤にして次の室(ま)へ逃げた。私も皆と一緒になつて笑つた。暫時(しばし)してから市子

は軽（かろ）い咳払をして、怎やら取済した顔をして出て来たが、いきなり復（また）私の前に坐つた。人々は、却つて之（これ）を興ある事にして、モウ市子〳〵と呼び立てなくなつた。

『菊池さんて方が。』と、女中が襖を開けて、敷居際に手をついた。話がバタリと止んで、視線が期せずして其方に聚（あつま）る。ヌツと許り髭面が入つて来た。

私は吸差の莨を灰に差した、人々は盃を下に置いた。西山社長は急（いそが）しく居住（ゐずまひ）を直して、此新来の人を紹介してから、

『馬鹿に遅いから来ないのかと思つて居た。』

と、さも容体（ようだい）ぶつて云つた。

『え、遅くなりました。』

と、菊池君は吃る様に答へて、変な笑ひを浮べ乍ら、ギロ〳〵一座を見廻したが、私とは斜（はす）に一番遠い、末座の空席に悠然（ゆつたり）と胡坐（あぐら）をかく。

皆は、それとなく此人の為す所を見て居たが、菊池君は両手に膝頭を攫（つか）んで、俯（うつむ）いて自分の前の膳部を睨んで居るので、誰しも話しかける機会を失つた。私は、空になつて居た盃を取上げて、「今来た方へ。」と市子に渡した時、志田君も殆んど同時に同じ事を云つて盃を市子に渡した。市子は盃を二つ捧げて立つて行つたが、

『彼方（あちら）のお方からお取次で厶（ござ）います。』
『誰方（どなた）？』
と、菊池君は呟く様に云つて顔を挙げる。
『アノ』と、私を見た盃を隣へ逸らして、『志田さんと仰しやる方。』
菊池君は、両手に盃を持つた儘、志田君を見て一寸頭を下げた。
『モ一つ其お隣の、…………橘さん。』と目を落す。
菊池君は私にも叩頭（おじぎ）をして、満々（なみなみ）と酌を享けたが、此挙動（やうす）は何となく私に興を催させた。
浮浪漢（ごろつき）みたいなと主筆が云つた。成程、新聞記者社

会には先づ類の無い風采で、極く短く刈り込んだ頭と、真黒に縮れて、乳(ち)の辺(あたり)まで延びた頬と顋(あご)の髭が、皮肉家に見せたら、顔が逆さになつて居るといふかも知れぬ。二十年も着古した様で、何色とも云へなくなつた洋服の、上衣の釦が二つ迄取れて居て、窄袴(ズボン)の膝は、両方共、不手際に丸く黒羅紗のつぎが当ててあつた。剰(あまつさ)へ洋襪(くつした)も足袋も穿いて居ず、膝を攫(つか)んだ手の指の太さは、よく服装(みなり)と釣合つて、浮浪漢か、土方の親分か、何(いづ)れは人に喜ばれる種類の人間に見せなかつた。然し其顔は、見なれると、髭で脅して居る程ではなく、形の整つた鼻、滋(うる)みを帯びて威のある眼、眼尻に優し

い情が罩(こも)つて、口の結びは少しく顔の締りを弛(ゆる)めて居るけれど、——若し此人に立派な洋服を着せたら、と考へて、私は不意に、河野広中の写真を何処かで見た事を思出した。

　菊池君から四人目、恰度私と向合(むかひあ)つて居て、芸妓を取次に二三度盃の献酬(やりとり)をした日下部君は、時々此方(こつち)を見て居たが、遂々盃を握つて立つて来た。ガツシリした身体を市子と並べて坐つて、無作法に四辺(あたり)を見廻したが、

『高い声では云へぬけれど、』と低くもない声で云つて、

『僕も新参者だから、新しく来た人で無いと味方にな

れん様な気がする。』

『私の顔は随分古いけれど、今夜は染直したから新しくなつたでせう。』と、志田君は、首から赤銅色になつた酔顔を突出して笑つた。

市子は、仰ぐ様にして横から日下部君の顔を見て居たが、

『私一度貴方(あなた)にお目にかかつてよ、ねえ。』

『さうか、僕は気が附かなかつた。』

『マア以前(このまへ)も家へ入(いら)しつた癖に、……薄情な人ね、此(この)方(かた)は。』

と云つて、夢見る様な目を私に向けて、微かな笑ひを

含む。

『橘さんは余り飲（や）らん方ですね。』と云つた様な機会（きつかけ）から、日下部君と志田君の間に酒の論が湧いて、寝酒の趣味は飲んでる時よりも、飲んで了つてからに有る、但しこれは独身者でなくては解りかねる心持だと云ふ志田君の説が、随分と立入つた語（ことば）を以て人々に腹を抱へさせた。日下部君は、朝に四合、晩に四合飲まなくては仕事が出来ぬといふ大酒家で、成程先刻（さつき）から大分傾けてるに不拘（かかはらず）、少しも酔つた風が見えなかつたが、

『僕は女にかけては然程（さほど）慾の無い方だけれど、酒となつちや然うは行かん。何処かへ一寸飲みに行つても、

銚子を握つて見て、普通より太いと満足するが、細いとか軽いとかすると、モウ気を悪くする。銭の無い時は殊にさうだね。』
『アツハハハ。』
と突然大きな笑声がしたので、人々は皆顔をあげた。それは菊池君であつた。
『私もそれならば至極同感ですな。』
と調子の悪い太い声。手は矢張胡坐の両膝を攫んで、グツと反返つて居た。
菊池君はヤヲラ立ち上つて、盃を二つ持つて来たが、
「マア此方へ来給へ、菊池君。」と云ふ西山社長の声が

したので、盃を私と志田君に返した儘其方(そつち)へ行つて了つた。西山は何時しか向うの隅の方へ行つて、私の方の主筆と、「札幌タイムス」の支社長と三人で何か話合つて居た。

座敷の中央(まんなか)が、取片付けられるので、何かと思つたら、年長(としかさ)な芸妓が三人三味線を扣(ひか)へて入口の方に列んだ。市子が立つて踊が始まる。

「香に迷ふ」とか云ふので、もとより端物ではあるけれど、濃艶な唄の文句が酔ふた心をそれとなく唆(そその)かす。扇の銀地に洋燈の光が映えて、目の前に柔かな風を匂はせる袂長く、そちら向けば朱の雲の燃ゆるかと眩(まぶ)し

き帯の立矢の字、裾の捌(さば)きが青畳に紅の波を打つて、トンと軽き足拍子毎に、チラリと見える足袋は殊更白かつた。恋に泣かぬ女の眼は若い。

踊が済んだ時、一番先に「巧い。」と胴間声を上げて、菊池君はまた人の目を引いた。「実に巧い、モ一つ、モ一つ。」と雀躍(こをどり)する様にして云つた小松君の語(ことば)が、三四人の反響を得て、市子は再(また)立つ。

此度のは、「権兵衛が種蒔けや烏がほじくる、」とか云ふ、頗(すこぶ)る道化たもので「腰付がうまいや。」と志田君が呟やいて居たが、私は、「若し芸妓の演芸会でもあつたら此妓(このこ)を賞めて書いてやらう。」と云つた様な事を、

酔ふた頭に覚束なく考へて居た。
踊の済むのを機会（きつかけ）に飯が出た。食ふ人も食はぬ人もあつたが、飯が済むと話がモウ勢（はず）んで来ない。帰る時、誰やらが後（うしろ）から外套を被（か）けて呉れた様だつたが、賑やかに送り出されて、戸外（そと）へ出ると、菊池君が私の傍（そば）へ寄つて来た。
『左の袂、左の袂。』
と云ふ。私は、何を云ふのかと思ひ乍ら、袂に手を入れて見ると、何かしら柔かな物が触つた。モウ五六間も門口の瓦斯燈（がすとう）から離れて居るので、よくは見えなかつたが、それは何か美しい模様のある淡紅色（ときいろ）の手巾（はんけち）で

あつた。

『ウアツハハハ。』と大きな声で笑つて、菊池君は大跨に先に立つて行つたが、怎やら少しも酔つて居ない様に見えた。

休坂（やすみざか）を下りて真砂町の通りへ出た時は、主筆と私と八戸君と三人限（きり）になつて居た。『随分贅沢な会を行（や）りますねえ。』と私が云ふと、

『ナニあれでも一人一円五十銭位なもんです。芸妓は何（ど）の料理屋でも、ロハで寄附させますから。』と主筆が答へた。私は何だか少し不愉快な感じがした。

一二町歩いてから、

『可笑(をかし)な奴でせう、君。』

と主筆が云ふ。私は、市子の事ぢやないかと、一寸狼狽(うろた)へたが、

『誰がです？』

と何気なく云ふと、

『菊池ツて男がさ。』

『アツハハハ。』

と私は高く笑つた。

三

翌日（あくるひ）は日曜日、田舎の新聞は暢気（のんき）なもので、官衙（やくしよ）や学校と同じに休む。私は平日（いつも）の如く九時頃に目を覚ました。恐ろしく喉が渇いて居るので、頭を擡（もた）げて［＃「頭を擡（もた）げて」は底本では「頭を擡（もた）げて」」見廻したが、下に持つて行つたと見えて鉄瓶が無い。用の無いのに起きるのも詰らず、寒さは寒し、さればと云つて床の中で手を拍つて、女中を呼ぶのも変だと思つて、また仰向になつた。幸ひ其処へ醜女（みたくなし）の芳ちやんが、新聞を持つて入つて来たので、知つてる癖に『モウ何時だい』と聞くと、

『まだ早いから寝て居なされよ、今日は日曜だもの。』

と云つて出て行く。
『オイ〳〵、喉が渇いて仕様が無いよ。』
『そですか。』
『そですかぢやない。真(ほんと)に渇くんだよ、昨晩少し飲んで来たからな。』
『少しなもんですか。』
と云つたが、急にニヤ〳〵と笑つて立戻つて来て、私の枕頭(まくらもと)に膝をつく。また戯(ぢや)れるなと思ふと、不恰好な赤い手で蒲団の襟を敲いて、
『私(わし)に一生のお願ひがあるで、貴方(あんた)聴いて呉れますか?』

『何だい？』

『マアさ。』

『お湯を持つて来て呉れたら、聴いてやらん事もない。』

『持つて来て上（あげ）るで。あのね、』と笑つたが『貴方（あんた）好（え）え物持つてるだね。』

『何をさ？』

『白ツぱくれても駄目ですよ。貴方の顔さ書いてるだに、半可臭（はんかくせ）え。』

『喉が渇いたとか？』

『戯談（じようだん）ば止しなされ。これ、そんだら何ですか。』と

手を延べて、机の上から何か取る様子。それは昨晩(ゆうべ)の淡紅色(ときいろ)の手巾(はんけち)であつた。市子が種蒔を踊つた時の腰付が、チラリと私の心に浮ぶ。

『嗅んで見さいな、これ。』と云つて自分で嗅いで居たが、小さい鼻がひこづいて、目が恍然(うつとり)と細くなる。恁麼(こんな)好い香(にほひ)を知らないんだなと思つて、私は何だか気の毒な様な気持になつたが、不意と「左の袂、左の袂」と云つた菊池君を思出した。

『私(わし)貰つてくだよ。これ。』と云ふ語(ことば)は、満更揶揄(からか)ふつもり許りでも無いらしい。

『やるよ。』

『本当がね。』と目を輝かして、懐に捻（ね）じ込む真似をしたが、

『貴方（あんた）が泣くべさ。』と云つて、フワリと手巾を私の顔にかけた儘、バタ〱出て行つた。

目を瞑（つむ）ると、好い香（にほひ）のする葩（はなびら）の中に魂が包まれた様で、自分の呼気（いき）が温かな靄（もや）の様に顔を撫でる。懵乎（ぼうつ）として目を開（あ）くと、無際限の世界が、唯モウ薄光（うすあかり）の射した淡紅色の世界で、凝（じつ）として居ると遥か〱向ふにポツチリと黒い点、千里の空に鷲が一羽、と思ふと、段々近いて来て、大きくなつて、世界を掩ひ隠す様な翼が、目の前に来てパツと消えた。今度は楕円形

な翳（かげ）が横合から出て来て、煙の様に動いて、もと来た横へ逸（そ）れて了ふ。ト、淡紅色の襖（からかみ）がスイと開いて、真黒な髭面の菊池君が……

　足音がしたので、急いで手を出して手巾を顔から蒲団の中へ隠す。入つて来たのは小い方の女中で、鉄瓶と茶器を私の手の届く所に揃へて、出て行く時一寸立止つて枕頭（まくらもと）を見廻した。お芳の奴が喋つたなと感付く。怎したものか、既（もう）茶を入れて飲まうと云ふ気もしない。

　昨夜の事が歴々（まざまざ）と思出された。女中が襖（からかみ）を開けて髭面の菊池君が初めて顔を出した時の態（さま）が、目に浮ぶ。

巌（いはほ）の様な日下部君と芍薬の様な市子の列んで坐つた態、今夜は染直したから新しくなつたでせうと云つて、ヌツト突出した志田君の顔、色の浅黒い貧相な一人の芸妓が、モ一人の袖を牽（ひ）いて、私の前に坐つて居る市子の方を顋（あご）で指し乍ら、何か密々（ひそひそ）話し合つて笑つた事、菊池君が盃を持つて立つて来て、西山から声をかけられた時、怎やら私達の所に座りたさうに見えた事、雀躍（こをどり）する様に身体を揺がして、踊をモ一つと所望した小松君の横顔、……それから、市子の顔を明瞭（はつきり）描いて見たいと云ふ様な気がして、折角努めて見たが、怎してか浮んで来ない。今度は、甚麼（どんな）気がしてアノ手巾を

私の袂に入れただらうと考へて見たが、否、不図すると、アレは市子でなくて、名は忘れたが、ソレ、アノ何とか云つた、色の浅黒い貧相な奴が、入れたんぢやないかと云ふ気がした。が、これには自分ながら直ぐ可笑くなつて了つて、又しても「左の袂、左の袂」を思ひ出す。……

「ウアツハハ」と高く笑つて、薄く雪明(ゆきあかり)のした小路を、大跨に歩き去つた。——其後姿が目に浮ぶと、(此朝私の頭脳(あたま)は余程空想的になつて居たので、)種々(いろん)な事が考へられた。

大跨に、然うだ、菊池君は普通(なみ)の足調(あしどり)でなく、屹度(きつと)

大跨に歩く人だ。無雑作に大跨に歩くから、時としてドブリと泥濘へ入る、石に躓く、真暗な晩には溝にも落こちる。若しかして溝が身長よりも深いとなると、アノ人の事だから、其溝の中を大跨に歩くかも知れない。

「溝の中を歩く人。」と口の中で云つて、私は思はず微笑した。それに違ひない、アノ洋服の色は、饐えた、腐つた、溝の中の汚水の臭気で那麼に変色したのだ。手！　アノ節くれ立つた、恐ろしい手も、溝の中を歩いた証拠だ。烈しい労働の痛苦が、手の指の節々に刻まれて居る。「痛苦の……生―活―の溝、」と、再口の

中で云つて見たが、此語（ことば）は、我乍ら鋭い錐で胸をもむ様な、連想を起したので、狼狽（うろた）へて「人生の裏路を辿る人。」と直す。

何にしても菊池君は失敗を重ねて来た人だ、と、勝手に断定して、今度は、アノ指が確かに私のの二本前太いと思つた。で、小児（こども）みたいに、密（そつ）と自分の指を蒲団の中から出して見たが、菊池君は力が強さうだと考へる。ト、私は直ぐ其喧嘩の対手を西山社長にした。何と云ふ訳も無いが、西山の厭な態度と、眼鏡越の狐疑（うたがひ）深い目付とが、怎しても菊池君と調和しない様な気がするので。——西山が馬鹿に社長風を吹かして威

張るのを、「毎日」の記者共が、皆蔭で悪く云つて居乍ら、面と向つてはペコペコ頭を下げる。菊池がそれを憤慨して、入社した三日目に突然、社長の頰片（ほつぺた）を擲る。社長は蹣跚（よろよろ）と行つて椅子に倒れ懸りながら、「何をするツ」と云ふ。其頭にポカ〳〵と拳骨が飛ぶ、社長は卓子（テイブル）の下を這つて向うへ抜けて、抜萃（きりぬき）に使ふ鋏を逆手に握つて、真蒼な顔をして、「発狂したか？」と顫声で叫ぶ。菊池君は両手を上衣の衣囊（ぽけつと）に突込んで、「馬鹿な男だ喃（なあ）。」と吃る様に云ひ乍ら、悠々と「毎日」を去る。そして其足で直ぐ私の所へ来て、「日報」に入れて呉れないかと頼む。——思はず声を立てて私は笑つた。

が、此妄想から、私の頭脳（あたま）に描かれて居る菊池君が、怎（どう）やら、アノ髭で、権力の圧迫を春風と共に受流すと云つた様な、気概があつて、義に堅い、豪傑肌の、支那的色彩を帯びて現れた。私は、小い時に読んだ三国史中の人物を、それか、これかと、此菊池君に当嵌めようとしたが、不図、「馬賊の首領に恁麼（こんな）男は居ないだらうか。」と云ふ気がした。

馬賊……満洲……と云ふ考へは、直ぐ「遠い」と云ふ感じを起した。ト、女中が不意に襖を開けて、アノ髯面が初めて現れた時は、菊池君は何処か遠い所から来たのぢや無かつたらうかと思はれる。考へが直ぐ移

る。
　昨夜(ゆうべ)の座敷の様子が、再鮮(また)かに私の目に浮んだ。然うだ、菊池君の住んで居る世界と、私達の住んで居る世界との間には、余程の間隔(へだたり)がある。「ウアツハハ。」と笑つたり、「私もそれなら至極同感ですな。」と云つたり、立つて盃を持つて来たりする時は、アノ人が自分の世界から態々(わざわざ)出掛けて来て、私達の世界へ一寸入れて貰はうとするのだが、生憎(あいにく)唯人の目を向けさせるだけで、一向効力(ききめ)が無い。菊池君は矢張、唯一人自分の世界に居て、胡坐をかいた膝頭を、両手で攫んで、凝然(じつ)として居る人だ。…………

ト、今度は、菊池君の顔を嘗て何処かで見た事がある様な気がした。確かに見たと、誰やら耳の中で囁く。盛岡——の近所で私は生れた——の、内丸の大逵（おほどほり）がパッと目に浮ぶ。中学の門と斜（はす）に向ひ合つて、一軒の理髪床（とこや）があつたが、其前で何日（いつ）かしら菊池君を見た……否、アレは市役所の兵事係とか云ふ、同じ級（クラス）の友人のお父様（とうさん）の髭だつたと気がつく。其頃私の姉の家では下宿屋をして居たが、其家（そこ）に泊つて居た髭……違ふ、違ふ、アノ髭なら気仙（けせん）郡から来た大工だと云つて、二ケ月（つき）も遊んでから喰逃して北海道へ来た筈だ。ト、以前（もと）私の居た小樽の新聞社の、盛岡生れだと云つた職工長

の立派な髭が頭脳（あたま）に浮ぶ。若しかすると、菊池君は何時か私の生れた村の、アノ白沢屋とか云ふ木賃宿の縁側に、胡坐をかいて居た事がなかつたらうかと考へたが、これも甚だ不正確（ふたしか）なので、ハテ、何処だつたかと、気が少し苛々（いらいら）して来て、東京ぢやなかつたらうかと、無理な方へ飛ぶ。東京と云へば、私は直ぐ、須田町——東京中の電車と人が四方から崩（なだ）れる様に集つて来る須田町を頭脳（あたま）に描くが、アノ雑沓の中で、菊池君が電車から降りる……否、乗る所を、私は余程（よつぽど）遠くからチラリと後姿を……無理だ、無理だ、電車と菊池君を密接（くつつ）けるのは無理だ……。

『モウ起きなさいよ、十一時が打(ぶ)つたから。那麼(そんな)に［#「那麼(そんな)に」はママ］寝てて、貴方何考へてるだべさ。』

と、取つて投げる様な、癇高い声で云つて、お芳が入つて来た。ハツとすると、血が頭からスーツと下つて行く様な、夢から覚めた様な気がして、返事もせず、真面目な顔をして黙つて居ると、お芳も存外真面目な顔をして、十能の火を火鉢に移す。指の太い、皸(あかぎれ)だらけの、赤黒い不恰好な手が、急がしさうに、細い真鍮の火箸を動かす。手巾を欲しがつてる癖に……と考へると、私は其手巾を蒲団の中で、胸の上にシツカリ握つてる事に気がついた。ト、急に之をお芳に呉れる

のが惜しくなつて来たので、対手にそれを云ひ出す機会を与へまいと、寝返りを打たうとしたが、怎したものか、此瞬間に、お芳の目元が菊池に酷似てると思つた。不思議だナと考へて、半分廻しかけた頭を一寸戻して、再お芳の目を見たが、モウ似て居ない。似る筈が無いサと胸の中で云つて、思切つて寝返りを打つ。

『私の顔など見たくもなかべさ。ねえ、橘さん。』

『何を云ふんだい。』

と私は何気なく云つたが、ハハア、此女が、存外真面目な顔をしてる哩と思つたのは、ヤレ〳〵、これでも一種の姿態を作つて見せる積りだつたかと気が付くと、

私は吹出したくなつて来た。
『フン。』
とお芳が云ふ。
私は、顔を伏臥(うつぷ)す位にして、呼吸(いき)を殺して笑つて居ると、お芳は火を移して了つて、炭をついで、雑巾で火鉢の縁を拭いてる様だつたが、軈(やが)て鉄瓶の蓋を取つて見る様な音がする。茶器に触る音がする。
『喉が渇いて渇いて、死にそだてがらに、湯ば飲まねえで何考へてるだかな。』
と、独語(ひとりごと)の様に云つて、出て行つて了つた。

四

社長の大川氏も、理事の須藤氏も、平生「毎日」の如きは眼中に無い様な事を云つて居て、私が初めて着いた時も、喜見(きけん)とか云ふ、土地(ところ)で一番の料理屋に伴れて行かれて、「毎日」が仮令(たとへ)甚麼(どんな)事で此方に戈を向けるにしても、自頭(てんで)対手にせぬと云つた様な態度で、唯君自身の思ふ通りに新聞を拵へて呉れれば可い、「日報」の如く既に確実な基礎を作つた新聞は、何も其日暮しの心配をするには当らぬと云ふ意味の事を懇々と説き聞かされた。高木主筆は少し之と違つて居て、流石は

創業の日から七年の間、「日報」と運命を共にして来て、（初めは唯一人で外交も編輯も校正も、時としては発送までやつたものださうだが、）毎日々々土地（ところ）の生きた事件を取扱つて来た人だけ、其説には充分の根拠があつた。主筆は、北海道の都府、殊にも此釧路の発達の急激な事に非常の興味をもつて居て、今でこそ人口も一万五千に満たぬけれど、半年程前に此処と函館とを繋いだ北海道鉄道の全通して以来、貨物の集散高、人口の増加率、皆月毎に上つて来て居るし、殊に中央の政界までも騒がして居る大規模の築港計画も、一両年中には着手される事であらうし、池田駅から分岐す

る網走（あばしり）鉄道の竣工した暁には、釧路、十勝、北見三国の呑吐港（どんとこう）となり、単に地理的事情から許りでなく、全道に及ぼす経済的勢力の上でも釧路が「東海岸の小樽」となる日が、決して遠い事で無いと信じて居た。されば、此釧路を何日までも「日報」一つで独占しようとするのは無理な事で、其為には、却つて「毎日」の如き無勢力な新聞を、生さず殺さずして置く方が、「日報」の為に恐るべき敵の崛起（くつき）するのを妨げる最良の手段であると云ふのが此人の対「毎日」観であつた。

にも不拘（かかはらず）、此三人の人は、怎したものか、何か事のある毎に、「毎日」の行動に就いて少からず神経過敏な

態度を見せて、或時の如きは、須藤氏が主として関係して居る漁業団体に、内訌が起つたとか起りさうだとか云ふ事を、「毎日」子が何かの序に仄めかした時、大川氏と須藤氏が平生になく朝早く社にやつて来て、主筆と三人応接室で半時間も密議してから、大川社長が自分で筆を執つて、「毎日」と或関係があると云はれて居る私立銀行の内幕を剔つた記事を書いた。

が、私が追々と土地の事情が解つて来るに随れて、此神経過敏の理由も読めて来た。ト云ふのは、大川氏が土地の人望を一身に背負つて立つた人で、現に町民に推されて、（或は推させて、）道会議員にもなつて居

るけれど、町が発達し膨脹すると共に種々(いろん)な分子が入交(いりこ)んで来て、何といふ事もなしに、新しい人を欲する希望が、町民の頭脳(あたま)に起つて来た。「毎日」の西山社長は、正に此新潮に棹(さをさ)して彼岸に達しようと焦慮(あせ)つて居る人なので、彼自身は、其半生に種々(いろん)な黒い影を伴つて居る所から、殆ど町民に信じられて居ぬけれど、長い間大川氏と「日報」の為に少からぬ犠牲を払はされて来て、何といふ理由(わけ)もなしに新しい人を望む様になつた一部の勢力家、——それ自身も多少の野心をもたぬでもない人々が、表面(うはべ)には出さぬけれど自然西山を援ける様になつて来た。私が大分苦心して集めた

材料（ざいれう）から、念の為に作つて見た勢力統計によると、前の代議士選挙に八分を占めて居た大川氏の勢力は、近く二三ヶ月後に来るべき改選期に於て、怎（どう）しても六分、——未知数を味方に加算して、六分五厘位迄に堕ちて居た。（大川氏は前には其得点全部を期日間際になつて或る政友に譲つたが、今度は自身で立つ積りで居る。）最も、残余の反対者と云つても、これと云ふ統率者がある訳で無いから、金次第で怎でもなるのだが。

で、「毎日」は、社それ自身の信用が無く、随つて社員一個々々に於ても、譬へば料理屋へ行つて勘定を月末まで待たせるにしても、余程巧みに談判しなければ

拒まれると云つた調子で、紙数も唯(たつた)八百しか出て居なかつたが、それでも能く続けて行く。「毎日」が先月紙店(かみや)の払ひが出来なかつたので、今日から其日々々に一聯宛買ふさうだとか、職工が一日(ついたち)になつても給料を払はれぬので、活字函(ケース)を転覆(ひつくらかへ)して家へ帰つたさうだとか云ふ噂が、一度や二度でなく私等の耳に入るけれど、それでも一日として新聞を休んだ事がない。唯八百の読者では、いくら田舎新聞でも維持して行けるものでないのに、不思議な事には、職工の数だつて敢て「日報」より少い事もなく、記者も五人居た所へ、また一人菊池を入れた。私の方は、千二百刷つて居て、外

に官衙（やくしょ）や銀行会社などの印刷物を一手に引受けてやつて居るので、少し宛積立の出来る月もあると、目の凹（くぼ）んだ謹直家（つつましや）の事務長が話して居たが。……

私は、這麼（こんな）事情が解ると共に、スツカリ紙面の体裁を変へた。「毎日」の遣り方は、喇叭節（ラツパぶし）を懸賞で募集したり、芸妓評判記を募つたり、頻りに俗受の好い様にと焦慮（あせ）つてるので、初め私も其向うを張らうかと持出したのを、主筆初め社長までが不賛成で、出来るだけ清潔な、大人らしい態度で遣れと云ふから、其積りで、記事なども余程手加減して居たのだが、此頃から急に手を変へて、さうでもない事に迄「報知」式にドン〳〵

二号活字を使つたり、或る酒屋の隠居が下女を孕ませた事を、雅俗折衷で面白可笑しく三日も連載物（つづきもの）にしたり、粋界の材料（たね）を毎日絶やさぬ様にした。詰り、「毎日」が一生懸命心懸けて居ても、筆の立つ人が無かつたり、外交費が無かつたりして、及びかねて居た所を、私が幸ひ独身者には少し余る位収入（みいり）があるので、先方（むかう）の路を乗越して先へ出て見たのだ。最初三面主任と云ふ事であつたのを、主筆が種々と土地の事業に関係して居て急しいのと、一つには全（まる）七年の間同じ事許りやつて来て、厭きが来てる所から、私が毎日総編輯をやつて居たので。

土地（とち）が狭いだけに反響が早い、為（す）る事成す事直ぐ目に付く。私が編輯の方針を改めてから、間もなく「日報」の評判が急によくなつて来た。

恁（か）うなると滑稽（をかしな）もので、さらでだに私は編輯局で一番年が若いのに、人一倍大事がられて居たのを、同僚（なかま）に対して気恥かしい位、社長や理事の態度が変つて来る。それ許りではない、須藤氏が何かの用で二日許り札幌に行つた時、私に銀側時計を買つて来て呉れた。其三日目の日曜に、大川氏の夫人（おくさん）が訪ねて来たといふので吃驚（びつくり）して起きると、「宅に穿かせる積りで仕立さしたけれど、少し短いから。」と云つて、新しい仙台平

の袴を態々（わざわざ）持つて来て呉れた。
　袴と時計に慢心を起した訳ではないが、人の心といふものは奇妙なもので、私は此頃から、少し宛、現在の境遇を軽蔑する様になつた。朝に目を覚まして、床の中で不取敢（とりあへず）新聞を読む。ト、私が来た頃までは、一面と二面がルビ無しの、時としては艶種（つやだね）が二面の下から三面の冒頭（あたま）へ続いて居る様な新聞だつたのが、今では全紙総（すつかり）ルビ付で、体裁も自分だけでは何処へ出しても恥かしくないと思ふ程だし、殊に三面――田舎の読者は三面だけ読む。――となると、二号活字を思切つて使つた、誇張を極めた記事が、賑々（にぎにぎ）しく埋めてある。

フフンと云つた様な気持になる。若しかして、記事の排列の順序でも違つてると、「永山の奴仕様がないな、いくら云つても大刷校正の時順序紙を見ない。」などと呟いて見るが、次に「毎日」を取つて見るといふと、モウ自分の方の事は忘れて、又候(またぞろ)フフンと云つた気になる。「毎日」は何日(いつ)でも私の方より材料(たね)が二つも三つも少かつた。取分け私自身の聞出して書く材料が、一つとして先方に載つて居ない。のみならず、三面だけにルビを附けただけで、活字の少い所から仮名許り沢山に使つて、「釧路」の釧(せん)の字が無いから大抵「くし路」としてあつた。新聞を見て了つて、起きようかナ

と思ふと、先づ床の中から両腕を出して、思ひ切つて悠暢（ゆつたり）と身延（のびのび）をする。そして、「今日も亦社に行つてと……ええと、また二号活字を盛んに使ふかナ。」と云ふ様な事を口の中で云つて見て、そして今度は前の場合と少し違つた意味に於て、フフンと云つて、軽く自分を嘲つて見る。「二号活字さへ使へば新聞が活動したものと思つてる、フン、処世の秘訣は二号活字にありかナ。」などと考へる。

　這麼（こんな）気がし出してから、早いもので、二三日経つと、モウ私は何を見ても何を聞いても、直ぐフフンと鼻先であしらふ様な気持になつた。其頃は私も余程土地慣

れがして来て、且つ仕事が仕事だから、種々(いろん)な人に接触して居たし、随つて一寸普通(なみ)の人には知れぬ種々な事が、目に見えたり、耳に入つたりする所から、「要するに釧路は慾の無い人と真面目な人の居ない所だ。」と云つた様な心地が、不断(たえず)此フフンといふ気を助長(たす)けて居た。

モ一つ、それを助長けるのは、厭でも応でも毎日顔を見では済まぬ女中のお芳であつた。私が此下宿へ初めて移つた晩、此女が来て、亭主に別れてから自活して居たのを云々と話した事があつたが、此頃になつて、不図した事から、それが全然(まるで)根も葉も無い事であると

解つた。亭主があつたのでも無ければ、主婦（おかみ）が強（た）つて頼んだのでもなく、矢張普通（ただ）の女中で、額の狭い、小さい目と小さい鼻を隠して了ふ程頬骨の突出た、土臼（どうす）の様な尻の、先づ珍しい許りの醜女（みたくなし）の肥満人（ふとつちよ）であつた。人々に向つて、よく亭主があつた様な話をするのは、詰り、自分が二十五にもなつて未だ独身（ひとりみ）で居るのを、人が、不容貌（ぶきりやう）な為に拾手が無かつたのだとでも見るかと思つてるからなので、其麼（そんな）女だから、何（ど）の室（へや）へ行つても、例の取て投げる様な調子で、四辺（あたり）構はず狎戯（ふざけ）る、妙な姿態（しな）をする。止宿人（おきやく）の方でも、根が愚鈍な淡白者（きさくもの）だけに面白がつて盛んに揶揄（からか）ふ。ト、屹度私の許へ来

て、何番のお客さんが昨晩這麼(こんな)事を云つたとか、那麼(あんな)事をしたとか、誰さんが私の乳を握つたとか、夏になつたら浴衣を買つてやるから毎晩泊りに来いと云つたとか、それは〳〵種々(いろん)な事を喋り立てる。私はよく気の毒な女だと思つてたが、それでも此滑稽な顔を見たら最後、腹の虫が喉まで出て来て擽(くすぐ)る様で、罪な事とは知り乍ら、種々な事を云つて揶揄ふ。然も、怎したものか、生れてから云つた事のない様な際敏(きはど)い皮肉までが、何の苦もなく、咽喉から矢継早に出て来る。すると、芳ちやんは屹度怒つた様な顔をして見せるが、此時は此女の心の中で一番嬉しい時なので、又、其顔

の一番滑稽（おどけ）て見える時なのだ。が、私は直ぐ揶揄ふのが厭になつて了ふので、其度（そのたんび）、

『モウ行け、行け。何時まで人の邪魔するんだい、馬鹿奴。』

と怒鳴りつける。ト、芳ちやんは小さい目を変な具合にして、

『ハイ行きますよ。貴方（あんた）の位（くれえ）隔てなくして呉れる人（しと）ア無えだもの。』

と云つて、大人しく出て行く。私は何日か、此女は、アノ大きな足で、「真面目」といふものの影を消して歩く女だと考へた事があつた。

社に行くと、何日でも事務室を通つて二階に上るのだが、余り口も利かぬ目の凹(くぼ)んだ事務長までが、私の顔を見ると、

『今日は橘さんへ郵便が来て居なんだか。』

と受付の者に聞くと云つた調子。編輯局へ入つても、兎角私のフフンと云ふ気持を唆(そそ)る様な話が出る。

其麼(そんな)話を出さぬのは、主筆だけであつた。主筆は、体格の立派な、口髯の厳(いかめ)しい、何処へ出しても敗(ひけ)をとらぬ風采の、四十年輩の男で、年より早く前頭の見事に禿げ上つてるのは、女の話にかけると甘くなる性(たち)な事を語つて居た。が、平生は至つて口少なな、常に鷹

揚に構へて、部下（した）の者の欠点（あら）は随分手酷くやツつけるけれども、滅多に煽動（おだて）る事のない人であつた。で、私に対しても、極く淡白に見せて居たが、何も云はねば云はぬにつけて、私は又此人の頭脳（あたま）がモウ余程乾涸（ひからび）て居て、漢文句調の幼稚な文章しか書けぬ事を知つて居るので、それとなく腹の中でフフンと云つて居る。

一体此編輯局には、他の新聞には余り類のない一種の秩序――官衙（やくしよ）風な秩序が有つた。それは無論何処の社でも、校正係が主筆を捉へて「オイ君」などと云ふ事は無いものだけれど、それでも普通（ただ）の社会と違つて、何といふ事なしに自由がある。所が此編輯局には、主

筆が社の柱石であつて動かすべからざる権力を持つて居るのと、其鷹揚な官吏的(おやくにんてき)な態度とが、自然さう云ふ具合にしたものか、怎かは知らぬが、主筆なら未だしも、私までが、「君」と云はずに「貴方」と云はれる。言語(ことば)のみでなく、凡ての事が然う云つた調子で、随つて何日でも議論一つ出る事なく、平和で、無事で、波風の立つ日が無いと共に、部下(した)の者に抑圧はあるけれど、自由の空気が些(ちつ)とも吹かぬ。

　私は無論誰からも抑圧を享けるでもなく、却つて上の人から大事がられて、お愛嬌を云はれて居るので、随分我儘に許り振舞つて居たが、フフンと云ふ気持に

なつて、自分の境遇を軽蔑して見る様になつて間もなくの事、――其麼気《そんな》がし乍らも職務《しごと》には真面目なもので、毎日十一時頃に出て四時過ぎまでに、大抵は三百行位も書きこなすのだから、手を休める暇と云つては殆んど無いのだが、――時として、筆の穂先を前歯で軽く嚙みながら、何といふ事なしに苦虫を嚙みつぶした様な顔をして居る事があつた。其麼時は、恰度、空を行く雲が、明るい頭脳《あたま》の中へサツと暗い影を落した様で、目の前の人の顔も、原稿紙も、何となしに煤《くす》んで、曇つて見える。ハツと気が付いて、怎して這麼《そんな》［＃「這麼《そんな》」はママ」気持がしたらうと怪んで見る。それが

日一日と数が多くなつて行く、時間も長く続く様になつて行く。

或日、須藤氏が編輯局に来て居て、

『橘君は今日二日酔ぢやないか。』

と云つた。恰度私が呆然(ぼんやり)と例の気持になつて、向側の壁に貼りつけた北海道地図を眺めて居た時なので、ハツとして、

『否(いいえ)。』

と云つた儘、テレ隠しに愛想笑ひをすると、

『さうかえ、何だか気持の悪さうな顔をして居るから、僕は又、何か市子に怨言(うらみ)でも云はれたのを思出してる

かと思つた。』
と云つて笑つたが、
『君が然うして一生懸命働いてくれるのは可いが、其為に神経衰弱でも起さん様にして呉れ給へ。一体余り丈夫でない身体な様だから。』
私は直ぐ腹の中でフフンと云ふ気になつたが、可成（なるべく）平生の快活を装うて、
『大丈夫ですよ。僕は薬を飲むのが大嫌ひですから、滅多に病気なんかする気になりません。』
『そんなら可いが、』と句を切つて、『最も、君が病気したら、看護婦の代りに市子を頼んで上（あげ）る積りだがね。』

ハハハ。』

『そら結構です、何なら、チヨイ〳〵病気する事にしても可いですよ。』

其日は一日、可成（なるべく）くすんだ顔を人に見せまいと思つて、頻りに心にもない戯談（じようだん）を云つたが、其麼（そんな）事をすればする程、頭脳（あたま）が暗くなつて来て、筆が渋る、無暗矢鱈に二号活字を使ふ。文選小僧は『明日の新聞も景気が可（え）えぞ。』［＃「『明日の新聞も景気が可（え）えぞ。』」は底本では「「明日の新聞も景気が可（え）えぞ。』」と工場で叫んで居た。

何故暗い陰影（かげ）に襲はれるか？　訝（をか）しいとは思ひ乍ら、

私は別に深く其理由(わけ)を考へても見なかつた。が、詰り私は、身体は一時間も暇が無い程急がしいが、為る事成す事思ふ壺に篏つて、鏡の様に凪いだ海を十日も二十日も航海する様なので、何日しか精神(こころ)が此無聊(ぶれう)に倦んで来たのだ。西風がドウと吹いて、千里の夏草が皆靡(なび)く、抗ふ樹もなければ、遮る山もない、ト、風は野の涯に来て自ら死ぬ。自ら死ぬ風の心を、若い人は又、春の真昼に一人居て、五尺の軒から底無しの花曇りの空を仰いだ時、目に湧いて来る寂しみの雲に読む。恋ある人は恋を思ひ、友ある人は友を懐(おも)ひ、春の愁と云はる「無聊の圧迫」を享けて、何処かしら遁路(にげみち)を求

めむとする。太平の世の春愁は、肩で風切る武士（さむらひ）の腰の物に、態（わざ）と触つて見る市井の無頼児である。世が日毎に月毎に進んで、汽車、汽船、電車、自動車、地球の周囲（まはり）を縮める事許り考へ出すと、徒歩で世界を一周すると云ひ出す奴が屹度出る。――詰り、私の精神（こころ）も、徒歩旅行が企てたくなつたのだ、喧嘩の対手が欲しくなつたのだ。

一月の下旬（すゑ）に来て。唯（たつた）一月経つか経たぬに這麼（こんな）気を起すとは、少し気早い――不自然な様に思ふかも知れぬが、それは私の性行を知らぬからなので……私は、北海道へ来てから許りも、唯（たつた）九ケ月の間に、函館、小

樽、札幌で四つの新聞に居て来た。何(ど)の社でも今の様に破格の優遇はして呉れなかつたが、其代り私は一日として心の無聊を感じた事がない。何か知ら企てる、でなければ、人の企てに加はる。其企てが又、今の様に何の障害(さはり)なしに行はれる事が無いので、私の若い精神は断間なく勇んで、朝から晩まで戦場に居る心地がして居た。戦ひに慣れた心が、何一つ波風の無い編輯局に来て、徐々(そろそろ)眠気(ねむけ)がさす程「無聊の圧迫」を感じ出したのだ。

這麼(こんな)理由とも気が付かず、唯モウ暗い陰影(かげ)に襲はれると自暴(やけ)に誇大な語(ことば)を使つて書く、筆が一寸躓(つまづ)くと、

くすんだ顔を上げて周匝（あたり）を見る。周匝は何時でも平和だ、何事も無い。すると、私は穂先を嚙んでアラヌ方を眺める。

主筆は鷹揚に淡白（あつさり）と構へて居る。八戸君は毎日役所廻りをして来て、一生懸命になつて五六十行位雑報を書く。優しい髯を蓄へた、色白の、女に可愛がられる顔立で、以前（もと）は何処かの中学の教師をした人なさうだが、至極親切な君子人で、得意な代数幾何物理の割に筆は立たぬけれど、遊廓種となると、打つて変つて軽妙な警句に富んだものを書く、私の心に陰影（かげ）のさした時、よく飛沫（とばちり）の叱言（こごと）を食ふのは、編輯助手の永山であ

つた。永山はモウ三十を越した、何日でも髪をペタリとチツクで撫でつけて居て、目が顔の両端にある、頬骨の出た、ノツペリとした男で、酔つた時踊の真似する外に、何も能が無い。奇妙に生れついた男もあればあるもので、此男が真面目になればなる程、其挙動（やうす）が吹き出さずに居られぬ程滑稽に見えて、何か戯談でも云ふと些（ちつ）とも可笑しくない。午前は商況の材料取（たねとり）に店廻りをして、一時に警察へ行く。帰つてから校正刷の出初めまでは、何も用が無いので、東京電報を訳さして見る事などもあるが、全然（まるで）頭に働きが無い。唯（たつた）五六通の電報に三十分も費して、それで間違ひだらけな

訳をする。

少し毛色の変つてるのは、小松君であつた。二十七八の、髯が無いから年よりはズツト若く見えるが、大きい声一つ出さぬ様な男で居て、馬鹿に話好きの、何日でも軽い不安に襲はれて居る様に、顔の肉を痙攣(ひきつ)けらせて居た。

此小松君は又、暇さへあれば町を歩くのか好きだといふ事で、市井の細かい出来事まで、殆んど残りなく聞込んで来る。私が、彼(か)の「毎日」の菊池君に就いて、種々の噂を聞いたのも、大抵此小松君からであつた。

其話では、——菊池君は贅沢にも桟橋前の「丸山」

と云ふ旅館(やどや)に泊つて居て、毎日草鞋(わらぢ)を穿いて外交に廻つて居る。そして、何処へ行つても、

『私は「毎日新聞」の探訪(たねとり)で、菊池兼治と云ふ者であります。』

と挨拶するさうで、初めて警察へ行つた時は、案内もなしにヅカ〳〵事務室に入つたので、深野と云ふ主任警部が、テツキリ無頼漢か何か面倒な事を云ひに来たと見たから、

『貴様は誰の許可を得て入つたか？』

と突然(いきなり)怒鳴りつけたと云ふ事であつた。菊池君は又、時々職工と一緒になつて酒を飲む事があるさうで、「丸

山」の番頭の話では、時として帰つて来ない晩もあると云ふ。其麼(そんな)時は怎も米町(よねまち)（遊廓）へ行くらしいので、現に或時(いつか)の晩の如きは職工二人許りと連立つて行つた形跡があると云ふ事であつた。そして又、小松君は、聯隊区司令部には三日置位にしか材料(たね)が無いのに、菊池君が毎日アノ山の上まで行くと云つて、笑つて居た。

四時か四時半になると、私は算盤を取つて、順序紙につけてある行数を計算して、

『原稿出切(できり)。』

と呼ぶ。ト、八戸君も小松君も、卓子から離れて各々(めいめい)自分の椅子を引ずつて暖炉(ストウブ)の周匝(あたり)に集る。此時は流石

に私も肩の荷を下した様で、ホツと息をして莨に火を移すが、軽い空腹（ひもじさ）と何と云ふ事の無い不満足の情が起つて来るので、大抵一本の莨を吸ひきらぬ中に帰準備（かへりじたく）をする。

宿に帰ると、否でも応でもお芳の滑稽（おどけ）た顔を見ねばならぬ。ト、其、何時（いつ）見ても絶えた事のない卑しい浅間しい飢渇の表情が、直ぐ私に、

『オイ、家の別嬪さんは今日誰々に秋波（いろめ）を使つた？』

と云ふ様な事を云はせる。

『マア酷いよ、此人は。私の顔見れば、そな事許り云つてさ。』

と、お芳は忽ちにして甘えた姿態(しな)をする。
『飯持つて来い、飯。』
『貴方(あんた)、今夜も出懸けるのがえ？』
『大きに御世話様。』
『だつて主婦(おかみ)さんが貴方の事心配してるよ。好(え)え人だども、今から酒など飲んで、怎するだべて。』
『お嫁に来て呉れる人が無くなるツテ訳か？』
『マアさ。』
『ぢやね、芳ちやんの様な人で、モ些(ちつ)と許りお尻の小さいのを嫁に貰つて呉れたら、一生酒を禁(や)めるからツてお主婦さんにそ云つて見て呉れ。』

『知らない、私(わし)。』と立つて行く。

夕飯が済む。ト、一日手を離さぬので筆が仇敵(かたき)の様になつてるから、手紙一本書く気もしなければ、書(ほん)など見ようとも思はぬ。凝然(じつ)として洋燈(ランプ)の火を見つめて居ると、断々(きれぎれ)な事が雑然(ごつちや)になつて心を掠める。何時しか暗い陰影(かげ)が頭脳(あたま)に拡(はびこ)つて来る。私は、恁(か)うして何処へといふ確かな目的(あて)もなく、外套を引被(ひつか)けて外へ飛び出して了ふ。

這麼(こんな)気持がする様になつてから、私は何故といふ理由もなしに「毎日」の日下部君と親しく往来する様になつた。ト共に、初め材料(たね)を聞出す積りでチヨイ〳〵

飲みに行つたのが、此頃では其麼(そんな)考へも無しに、唯モウ行かねば気が落付かぬ様で、毎晩の様に華やかな絃歌の巷に足を運んだ。或時は小松君を伴れて、或時は日下部君と相携へて。

星明りのする雪路を、身も心もフラ〳〵として帰つて来るのは、大抵十二時過ぎであるが、私は、「毎日」社の小路の入口を通る度に、「僕の方の編輯局は全然(まるで)梁山泊だよ。」と云つた日下部君の言葉を思出す。月例会に逢つた限(きり)の菊池君が何故か目に浮ぶ。そして、何だか一度其編輯局へ行つて見たい様な気がした。

五

三月一日は恰度日曜日。快く目をさました時は、空が美しく晴れ渡つて、東向の窓に射す日が、塵に曇つた硝子を薄温かに染めて居た。

日射（ひざし）が上から縮（ちぢま）つて、段々下に落ちて行く。颯（さつ）と室（へや）の中が暗くなつたと思ふと、モウ私の窓から日が遁げて、向合つた今井病院の窓が、遽（には）かにキラ〳〵とする。午後一時の時計がチンと何処かで鳴つて、小松君が遊びに来た。

『昨晩怎でした。面白かつたかえ？』

『随分な入りでした。五百人位入つた様でしたよ。』
『釧路座に五百人ぢや、桟敷が危険(あぶな)いね。』
『ええ、七時頃には木戸を閉めツちやツたんですが、大分戸外(おもて)で騒いでましたよ。』
『其麽(そんな)だつたかな。最も、釧路ぢや琵琶会が初めてなんだからね。』
『それに貴方が又、馬鹿に景気をつけてお書きなすツたんですからな。』
『其麽事もないけれども……訝(をか)しなもんだね。一体僕は、慈善琵琶会なんて云ふ「慈善」が大嫌ひなんで、アレは須(すべか)らく偽善琵琶会と書くべしだと思つてるん

だが、それでも君、釧路みたいな田舎へ来てると、怎も退屈で退屈で仕様がないもんだからね。遂(つい)ソノ、何かしら人騒がせがやつて見たくなるんだ。』

『同意(まつたく)ですな。』

『孤児院設立の資金を集めるなんて云ふけれど、実際はアノ金村ツて云ふ琵琶法師も喰(くは)せ者に違ひないんだがね。』

『でせうか?』

『でなけや、君、……然うく、君は未だ知らなかつたんだが、昨日彼奴(あいつ)がね、編輯局へビールを、一打(ダース)寄越したんだよ。僕は癪に触つたから、御好意は有難い

が此代金も孤児院の設立資金に入れて貰ひたいツて返してやつたんだ。』

『然うでしたか、怎も……』

『慈善を餌に利を釣る。巧くやつてるもんだよ。アノ旅館（やどや）の贅沢加減を見ても解るさね。』

『其麽（そんな）事があつた為ですか、昨晩頻りに、貴方がお出にならないツて、金村の奴心配してましたよ。』

『感付かれたと思つてるだらうさ。』

『然う〳〵、まだ心配してた人がありましたよ。』

『誰だえ？』

『市ちやんが行つてましてね。』

『誰と？』
『些（ちつ）とは御心配ですかな。』
『馬鹿な……ハハハ。』
『小高に花助と三人でしたが、何故お出にならないだらうツて、真実（ほんと）に心配してましたよ。』
『風向が悪くなつたね。』
『ハツハハ。だが、今夜はお出になるでせう？』
『左様、行つても好いけどね。』
『但し市ちやんは、今夜来られないさうですが。』
『ぢや止さうか。』
と云つて、二人は声を合せて笑つた。

『立つて聞きましたよ。』

と、お芳が菓子皿を持つて入つて来た。

『何を？』

『聞きましたよ、私。』

『お前の知つた人の事で、材料(たね)が上つたツて小松君が話した所さ。』

『嘘だよ。』

『高見さんを知つてるだらう？』と小松君が云ふ。

『知つて居りますさ、家に居た人だもの。』

『高見ツてのは何か、以前(もと)社に居たとか云ふ……？』

『ハ、然うです。』

『高見さんが怎かしたてのかえ？』

『したか、しないか、お前さんが一番詳しく知つてる筈ぢやないか？』

『何云ふだべさ。』

『だつて、高見君が此家(このうち)に居たのは本当だらう。』

『居ましたよ。』

『そして。』

『そしてツて、私何も高見さんとは怎もしませんからさ。』

『ぢや誰と怎かしたんだい？』

『厭だ、私(わし)。』

と、足音荒くお芳が出て行く。

『馬鹿な奴だ。』

『天下の逸品ですね、アノ顔は。』

『ハハハ。皆(みんな)に揶揄(からかは)れて嬉しがつてるから、可哀相にも可哀相だがね。餓ゑたる女と云ふ奴かナ。』

『成程。ですけれど、アノ顔ぢや怎も、マア揶揄(からか)つてやる位が一番の同情ですな。』

『それに余程(よつぽど)の気紛れ者(もん)でね。稼ぎ出すと鼻唄をやり乍ら滅法稼いでるが、怠け出したら一日主婦(おかみ)に怒鳴られ通しでも平気なもんだ。それかと思ふと、夜の九時過に湯へ行つて来て、アノ階段(はしご)の下の小さな室で、一

生懸命お化粧(つくり)をしてる事なんかあるんだ。正直には正直な様だがね。』
『そら然うでせう。アノ顔で以て不正直と来た日にや、怎もなりませんからね。』
と云つて、小松君は暫らく語(ことば)を切つたが、
『さう〳〵、「毎日」の菊池ですね。』
『耘(うん)。』
『アノ男は怖い様な顔してるけれど正直ですな。』
『怎して？』
『昨晩矢張琵琶会に来てましたがね。』

〔生前未発表・明治四十一年五月稿〕

底本：「石川啄木全集　第三巻　小説」筑摩書房
　　　１９７８（昭和53）年10月25日初版第1刷発行
　　　１９９３（平成５年）年５月20日初版第７刷発行
※生前未発表、１９０８（明治41）年５月執筆のこの作品の本文を、底本は、市立函館図書館所蔵啄木自筆原稿によっています。
入力：Nana ohbe
校正：川山隆
２００８年10月18日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。